第65回定期演奏会批評

音楽の友 ONGAKU NO TOMO 2010.1月号

Concert Reviews

オーケストラ

東京ニューシティ管弦楽団（第65回）

作曲家の想定した作品本来の姿を再現しようという意図のもと、モダン楽器によるピリオド奏法を実践している内藤彰音楽監督がブラームス「ピアノ協奏曲第2番」と「交響曲第3番」をとりあげた。ソリストには谷川かつらが予定されていたが、急病のため急遽、中井恒仁に変更。中井の明晰な構築力と力強いピアニズムは、このシンフォニックな造りと響きを持つ大作に似つかわしいものであったが、そこを女性の谷川がどう聴かせてくれるのか期待していただけに残念。本復を祈念したい。当夜感じたのは、ブラームスがいかに楽器の扱いと管弦楽法に通じていたかである。同団の主張のように、彼は各楽器固有の多彩な表現技巧を最大限に生かしてオーケストラの巨大な伽藍を実現したのであって、そこにはヴィブラートの有無を超越した音楽が存在する。協奏曲のアンダンテ楽章で独奏チェロが内なる発露としてヴィブラートをかけて甘美に歌い、違和感のなかったことからもそれを確認できたように思う。

交響曲はよく練り上げられた佳演。管楽器のハーモニーも協奏曲のときより美しく、弦の緊密感も高まった。ことに、緊張感に貫かれたフィナーレは当夜の白眉。**11月13日・東京芸術劇場**

●萩谷由喜子